特集 世界の住まい 今

変わりつつあるカンボジアの住まい

初鹿野 直美

長く内戦の続いたカンボジアでは、和平後の高い経済成長のなかで、住宅事情も大きく変化してきた。今日のプノンペン市内は日々新しい建物が建ち、高層ビルが現れ、目覚しい勢いで風景が変わりつつある（写真1）。新聞やウェブサイトの売買広告の欄には、おしゃれな一戸建てやマンションの広告が並ぶ。本稿では、まずカンボジアの伝統的な住まいについて、農村部および都市部の典型的な居住形態と主に都市部での変化について説明する。そのうえで、一九九八年と二〇〇八年に実施された人口センサスの結果（参考文献①）にもとづき、住まいの実態と近年の変化を紹介する。

写真1　建築中の建物が多くみられたプノンペン中心部・ボンケンコン地区（2008年4月）。

写真2　建設中の伝統的家屋。オッドーミアンチェイ州の農村にて（2009年5月）。

●カンボジアの伝統的住まいと変化

カンボジアの農村部の伝統的な住まいは、木造の高床式住居である（写真2）。これは、洪水を避けたり、熱帯の暑さや虫による病気を避けたりするためであるといわれる。屋根は赤みがかった瓦や藁葺きである。階下には、農機具や機織機などに加え、夕涼み用の台があり、どこからともなく人々がそこに集い、茶飲み話に花を咲かせるのが、農村部の典型的な風景である。ほかには、椰子の葉やバナナの葉を編んで作った簡易な家に住む人たちがいたり、また、河川・湖には、ボートの上に家を建てる水上集落を形成する人々もある。

都市部では、石造りの長屋・プテアロヴェーンが一般的である。通り沿いに三～四階建ての長屋が数軒連なる。一階は頑丈な門扉に覆われており、車やバイクが駐車されている家も多い。一軒全体を一族でシェアする人たちもいれば、フロアの一部を借家とすることもある。プノンペンの富裕層のなかには、おとぎ話の宮殿と見まがうばかりの大豪邸に住む人たちもおり、たとえばトゥールコーク地区の一部の地域には、そのような豪邸が集積している。その目と鼻の先にはトタンでつくられた仮住まいに住む人たちも相当数おり、再開発で立ち退き問題が生じたり、乾季の大火事で一〇〇軒超の家々が焼失することもある。

二〇〇〇年代半ばから、プノンペン近郊では、衛星都市プロジェクトとして、住宅開発が進んでいる。プノンペン北部に位置するカムコ・シティ、グランド・プノンペンなどは、高級マンション・住宅とあわせて、公共施設、エンターテインメント施設などが併設され、販売開始直後に半数以上が売れるという人気ぶりであった。中心部でも、デカッスル、ゴールドタワー四二といった高層マンションが売り出された。二〇一〇年、政府は外国人に建物に対する不動産所有を認める法令を制定し、不動産投資に外資を呼び込もうとし

た。もちろん外国人からの投資も多く見られるが、一方でカンボジア人自身による購入・投資も多く見られる。投資目的での購入も多く、二〇〇八年夏以降の不動産価格の急落に辛酸をなめている人たちもいるようだが、実際に「住む」ことを目的としてこれらの物件を購入している人たちもいる。一部の富裕層のみにとどまらず、内戦時代に海外に避難していた人々、留学等で欧米のライフスタイルに触れた若い世代など、勃興しつつある中間層が新しい種類の住まいを求めつつあるようである。従来、ローンを組んで住宅を買うというような習慣がなかったカンボジアでも、銀行が住宅ローンの提供を始めており、まだ規模は小さいながらも利用実績は増えている。

●統計データにみる近年の住居の変化

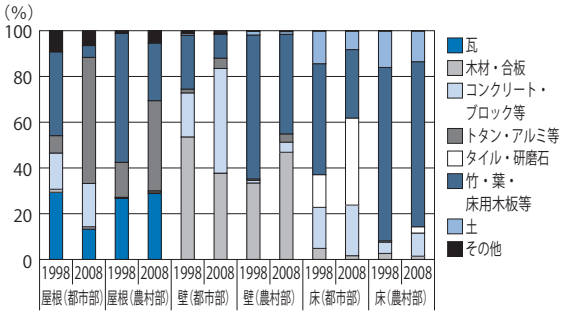
一九九八年と二〇〇八年の人口センサスから、近年の住居について、建築資材、設備についての実態を見ていこう。人口は一九九八年時点で都市部約二〇〇万人、農村部約九二〇万人、二〇〇八年時点で都市部約二五〇万人、農村部約一〇七〇万人であった。また、平均世帯構成員数は一九九八年は五・一八人（都市部五・五〇人、農村部五・一一人）、二〇〇八年は四・六八人（都市部四・九二人、農村部四・六二人）である。

一般家屋の建築素材は、屋根ならコンクリート・瓦・トタン・木材・竹・葉、壁は木材・コンクリート・トタン・竹・葉など、床はタイル・木材などが主要な素材である。都市部ではコンクリートなどの素材が多く、農村部は木造家屋が多いことがデータからもわかる。一〇年のあいだに、都市部ではコンクリートやトタンの家の割合がさらに増え、農村部では竹・葉などを使用した家が減少し木材やトタンの使用が増えている（図1）。

一般家屋の設備についてみてみると、電気は、一九九八年一二・六％（都市部五六・九％）が、二〇〇八年二二・五％（都市部八二・五％）にまで改善した。なお、一九九八年は、農村部で九割近い人々が明かりのために灯油を使用していたが、二〇〇八年、灯油の使用は半減し、代わりにバッテリーを利用し、電灯やテレビなどの電源とするようになった。

水道は、都市部では二六・八％から五六・八％へと普及が大きく進んだ。農村部では、一・五％が四・四％に増加したが、井戸や川の水の使用が主流である。気になるのは、農村部でのトイレ普及率の低さである。一九九八年、農村部の九四％の家ではトイレがなかったが、二〇〇八年も七七％の家では引き続きトイレがない。筆者の友人は、田舎からプノンペンに出てきたころ「トイレの閉鎖空間が嫌でしょうがなかった」と言う。生活の変化が農村部に及ぶには、もう少し時間がかかりそうである。なお、センサスから三年経ち、これらの設備は更に普及が進んでいるものと思われる。

図1　一般家屋の建築資材



（出所）人口センサス1998年および2008年データ（参考文献①）より筆者作成。

●カンボジアの住まいの将来

一人当たりGDPが数年内に一〇〇〇ドルに迫ろうという今日、人々はより「豊かな生活」を求めて、歩みを進めようとしている。次々に住宅開発が進められ、その勢いはプノンペンのみにとどまらず地方へとひろがっている。二〇〇八年からいくつかの大規模プロジェクトが資金不足のために工事が中断する事態が起きていることには留意せねばならないが、住まいをめぐる状況が変わりつつあることは確かである。高層マンションや新しいタイプの住宅地は、新しいカンボジアの姿を象徴する風景のひとつであるといえよう。

（はつかの　なおみ／アジア経済研究所東南アジアⅡ研究グループ）

《参考文献》

①National Institute of Statistics, Ministry of Planning [2010] "Analysis of the Census Results Report 10: Housing and Household Amenities."